

## オバマのアメリカ帝国

### —その没落プロセスにどう関与するか

C・ダグラス・ラミス（政治学）×武藤一羊（本誌編集委員） 司会：山口響（本誌編集委員）

—今日の対談では、一月に新しく誕生した米国のバラク・オバマ政権をどうみるか、それが世界や日米関係にどのような影響を与えるかといったことについて、お二人に大いに話していただきたいと思います。では、まず、ラミスさんから。

#### オバマへの期待と不安

ラミス まず言わなきゃいけないことは、僕自身、オバマ個人に対して動揺する気持ちがあるということです。オバマはこの選挙には人種は関係ないといったけれども、実際にはものすごく関係があった。黒人が大統領選挙に出て勝ちそうになったら、どうしても応援したくなるんです。僕は、アメリカの公民権運動の時代に政治教育を受けたので、どうしてもそういう気持ちが出てくる。黒人が大統領になるなんてことは、半世紀前には考えられませんでした。彼が当選したとき、シカゴの黒人の皆さんが街頭に出て大喜びし、涙を流していました。そういうのに対して、僕はと

ても弱いんです。もしかすると、アメリカ国内がこれで少しはよくなるんじゃないかと思った。ブッシュ政権のときは、夏休みになってもアメリカに帰りたくない、という気持ちがあったんですね。でも、オバマの場合は、失敗してほしくない、応援したい、という気持ちがある。各政策を見るとそう言えないのもありますが。

逆に、オバマ政権はものすごい悲劇に終わるんじゃないかという恐れもあるんです。オバマを応援した人たちは、すごく高い希望や期待をもっているわけ。海外でもそうでした。沖縄でも、「オバマに手紙を書こう」とか「この人なら沖縄のことを理解してくれるはず」とかい意見がありました。国内のことである程度いいことがあるかもしれない。でも、金融危機に対処する能力があるかもしれない。僕は経済学は弱いけれど、オバマ政権の間に不景気が長く続くと、それはオバマのせいだということになるかもしれません。

また、オバマ政権は、いわゆるテロ容疑者への拷問をや

めると言っている。これはいいことだ。グアンタナモの収容所も閉鎖すると言っているけれど、まだやっていません。それから、「先制攻撃はいけない」とは言っています。イラクから撤退はするけれど、それは、「イラク戦争は戦略的にまずかった」と言っているだけです。アフガニスタンでは同じように先制攻撃をして、無理して傀儡政権を作ったわけだけど、それを悪かったとも言っていないですね。

#### オバマと「帝国」

ラミス 米国は、ブッシュ政権以前から「帝国」だったわけですよ。そういう言葉は使わなかったけれど、でも、ブッシュ政権になったら、アメリカが「帝国」であるとはっきり言っている、ということになった。アメリカが「帝国」で何が悪い、という記事や本が始めたんです。オバマ政権はそれをやめようとはしていないんですね。ブッシュ政権がやったことをちょっと訂正する程度。「帝国」としては、「五歩前進、一歩後退」といったところでしょうかね。武藤 僕は、アメリカ帝国というものは第二次世界大戦後に成立したと思っています。戦後のアメリカは、「ただの一国」ではないという地位を、ブレトンウッズ体制や国連も含めて、保証してもらっていました。金・ドル交換を維持して、ドル体制を作った。その意味では、形式的にも実

質的にも「帝国」として出現したのは第二次大戦後だと思っています。

ただし、本当の「グローバル帝国」ではなかった。世界は、ソ連とアメリカの間で分割されていました。ソ連も帝国だったから、二つの帝国の併存と世界の分割だった。アメリカとしては、もともとグローバル帝国になりたかったのを阻止されていた状態。アメリカが本当の意味でグローバル帝国になったのは、ソ連崩壊の後ですね。これはアメリカにとつてある意味では万々歳なんだけど、実際には、それ以前から、帝国としての基盤は弱まっている。だから世界帝国の成立とともに崩れ始める。七〇年代のニクソン・ショックのときにすでに帝国は没落期に入っているんですね。ようやくグローバル帝国になったときには、その基盤である資本主義はものすごい矛盾を抱えるようになっていた。

しかし、このアメリカ「帝国」は、ある種のグローバルな複合的権力として成立しているもので、ひとつの中心的な権力があるわけではありません。アメリカは軍事力は強いし、経済も大きい。したがって、支配力はある。しかし世界を国民国家としてのアメリカだけが仕切っていたわけではなくて、グローバルな権力の中には多国籍資本もいるし、ヨーロッパや日本もいる。グローバルに見れば、同じ方向を向いて同じ利益を共有しているんだけど、フォーマルな形をとらない巨大な権力が存在していて、アメリカ

はその中核にいて、アメリカ抜きでは成り立たないという編成になっているわけですね。しかし、その権力編成自体が九〇年代にはガタガタになっているんですね。

ブッシュ（父）政権は一九九二年、第一次イラク戦争をやって、「新世界秩序」を作ったと宣言するけれど、これは大失敗に終わる。ようやくクリントン期に、軍事的にももの考え方の面でも、ソ連がいなくなった状態に対応する体制を作りました。それが、「全領域支配」(Full-spectrum dominance) という言葉で表わされる。あらゆる面でアメリカが優越していなければならない、そのようなヘゲモニーに挑戦するような相手も叩き潰す、ということですね。おもしろいことに、そうした戦略は、東アジアの問題に対応する中から出てくるんですね。対中国が頭にあるわけです。

「ソ連の脅威から自由を守らねばならない」ということだと、アメリカは「ワン・オブ・ザ・ツ」(二つのうちのひとつ)です。そこではアメリカの必要軍力はソ連の軍事力で測る。尺度があるということです。しかしこの尺度としての相手が消滅して、「全領域支配」ということでは、無限の力が必要になってくるんですね。

ラミス 「三つの戦争を同時に遂行できるように」などと云われますね。

武藤 でも、どんな戦争かわからないし、どこに敵が出ています。それがオバマの勝利をもたらした。アメリカというジャンボ・ジェット機は上昇角度を上げすぎて失速した。それをどうやって安定飛行まで持っていくかというのがオバマの任務でしょうね。オバマはなんとか帝国を立て直すうとしているわけで、ラミスさんがおっしゃるように、「脱帝国」なんかじゃないことは明らかですよ。

しかし、この帝国は明らかに没落期に入っているけれど、その没落というのは、近く他の国家のヘゲモニーに取って代わられる過渡期とは考えられないんじゃないかというのがぼくの見通しです。中国やロシア、あるいはヨーロッパへのヘゲモニーの移行があるそうかという、ぼくは国民国家が担うグローバルヘゲモニーはアメリカが最後じゃないかと思っています。アメリカ帝国の没落期というのはそれ自身がひとつの時代なんだと思うんです。その意味で、フランシス・フクヤマはうまくいっています。彼はなんと選挙直前にオバマ支持に回ったんですが、その理由は、オバマの方が「アメリカの衰退をうまく管理できるから」だということです。うまく言い当ててますよね。

ラミス ついこの間、ハドソン川に飛行機がうまく不時着する事件があったけど、何かを予示しているんですかね。武藤 さあ、どうでしょう(笑)。わかりませんね。

くるかもわからなくなつたのだから、無限なんですよ。で、クリントン期に出現した世界帝国は、無限の責任を負わなくてはならないような自己定義をした。その経済的実態というのは新自由主義的なグローバルバリエーションで、多国籍企業とか投機資本などが支配する時期ですよ。そういうインフォーマルな権力中心の方はアメリカが「全領域支配」してくるのは歓迎だった。ところが、ブッシュ（子）政権は、その権力の中のクーデターを起こしたんだと思うんです。アメリカ国家が、いろいろな支配勢力によって複合的に構成されているグローバルな権力を一國で乗っ取った。

ラミス フランスもドイツもいらぬ。国際法もいらぬ。

武藤 国際法は帝国のパワーを維持するにはある程度尊重することが必要だった。ところがブッシュはそれにクーデターを起こして、自分が法だと宣言し、そのためヨーロッパとも分裂した。グローバル権力内部でのクーデターでした。でも、結局そのクーデターは失敗したんですね。ただ、そのことは世界全体では明らかでも、アメリカ国内ではそれほど明らかではなかったんじゃないでしょうか。だからブッシュ政権の政治の認識をめぐる内外格差はほんとにひどいものになっていた。今度の大統領選挙で、アメリカ国内でもその失敗がはつきり認められたと思うことだと思っ

### ブッシュ政権による国際法の無視

ラミス 国連憲章によれば、国を侵略することは国際法違反、戦争犯罪ですね。トルーマン大統領の時代から、クリントン大統領の時代まで、ひどい「防衛」戦争はやってたけれども、形としては「国際法は守られていた」。冷戦時代は「封じ込め政策」、つまり、ソ連を侵略することはない、しかし、ソ連勢力が拡大しようとすればそれを止めるという政策です。それで、沖縄や日本など、ソ連の外側にずつつと基地を作った。それでいっぱい戦争はしたけれども、「侵略」戦争はしなかった。

しかし、ブッシュ（子）政権では、アメリカは先制攻撃をしてもよろしい、ということになりました。先制攻撃と侵略戦争の区別はとくにありません。そして、実際、アフガニスタンとイラクに先制攻撃をしかけたわけです。アフガンもイラクも、アメリカと戦争をするつもりもないし、準備もないし、能力もありませんでした。それでも侵略したんです。国際法違反のことをやってもいい、気に入らない政権は交代させてもよろしい、ということ。過去に中南米でそういうことをやったことはありません。

それから、アメリカに入国したことのない外国人を他國で逮捕する権利がある、と言いだして、それを実行に移したわけ。それでたくさんの方が監禁されています。以前は



も与えないし、犯罪容疑者としての権利も与えない。だから、グアンタナモみたくところに刑務所を作るわけですから、そこには、キューバの刑法もアメリカの刑法も届かない。

ブッシュ（子）政権以前のアメリカは、「法の下平等」を認めた国際法を了承していたんです。それぞれの国家はだいたい同じような権利を持っている、と。しかし、ブッシュ（子）政権でそれも崩れました。先制攻撃をする権利のある国はすべての国じゃないんです。そうはつきりとは言わないけど、暗黙の了解です。別の国で人を逮捕する権利をアメリカ以外には認めてないんです。ペルーのフジモリ元大統領は日本にいましたが、もしペルー警察が日本で彼を逮捕したなら大騒ぎになるでしょう。このように、国際法上の不平等があり、だから、アメリカは比喩的な意味での帝国ではなくて、文字通り「帝国」を作り始めていた

刑法は国境までしか及ばなかったのが、国境を越えるようになっていきます。しかし、捕まえた人には、捕虜としての権利

のです。

### 放棄された「テロに対する戦争」

ラムミス それに関連して、ブッシュ（子）政権時代に新しく出てきた概念として、「テロに対する戦争」があります。ソ連がいなくなったときに軍事力をどういう範疇のものとして考えるかという、ひとつの解決策になるわけですね。以前には、テロは犯罪として扱われ、刑法が適用されてきました。裁判で有罪か無罪かを定める、そういう「めんどくさい」やり方を使っていました。しかし9・11テロ後は、テロに対する「戦争」だということになった。これは便利なやり方なんです。犯罪として扱うんだったら、容疑者を殺してはいけません。しかし、戦争だったら、容疑者を殺してもよい。「テロに対する戦争」というのは、先ほど武藤さんが言った「全領域支配」の軍事的な面になるわけです。それは国に対する戦争ではなく、テロというひとつの戦術に対する戦争です。世界中のどこであっても、そういう戦術に対して戦争を起こしてもいいということになります。そしてそれは、終わりのない戦争になるんですね。政府の建物もない大統領もいない。誰かが白い旗を振ったら終わり、というものではないんです。それもまた、オバマ政権では継続しています。

武藤 そこは非常に微妙だと思いますね。まず、「テロに

対する戦争」(War on Terror) という言葉は公式には使われなくなったようですね。

ラムミス 言葉を変えることには何か意味がありますか？

武藤 あると思います。「テロに対する戦争」ということは、アメリカが戦時国家であることを意味していたからです。オバマはこれを「過激派」(extremists) への闘いと言い換えて、戦時大統領であることからはおりたと思うのです。「闘い」とあるとは言っているけれども、「戦争」であるとは言っていない。しかし、それをどこまで実質的に切り替えることができるかどうかは、未知数だと思う。アフガニスタンへの軍事介入は逆に強化するわけですから、そこから元の黙阿弥になる可能性はある。とはいえ、「テロに対する戦争」という規定を維持するかどうかはやはり決定的な意味があると思います。グアンタナモ収容所っていうのは「テロに対する戦争」の産物ですよ。戦争」だからテロ容疑者に刑法は適用しない。しかし、「テロに対する（相手が国家ではない）」戦争だから、捕らえた人を戦時国際法の適用される捕虜としては取り扱わない。つまり、刑法と戦時法の両方から逃れるように作った化け物みたいな存在なわけです。だとすると、グアンタナモの問題は、オバマにとって、そのどちらかを取らなくてはならないという

ことですね。「戦争」とするならば捕虜扱いしなくてはいけないし、「テロ」とするならば刑法で裁かなきゃいけない。

グアンタナモをつぶすということの中には、「テロに対する戦争」をやめるということが含意されていると思います。ラムミス はたして、本当につぶすかどうか。武藤 つぶさないわけにはいかないでしょうね。選挙公約の目玉ですからね。もつとも、それで「帝国」でなくなるということではありませんが、少なくとも、ブッシュ（子）のクーデターの結果生まれたものは清算するということだと思います。

### イラクからの撤退と泥沼化するアフガン

—— つぎに、個別の状況に話を移します。まず、イラクから米軍の撤退について、どのように解釈されますか。

ラムミス イラク戦争についてもっとも真剣に文章を書いた人のひとりとして、アイルランドのパトリック・コバーンがいます。彼は、去年の秋にアメリカとイラクが米軍の地位協定を結んだときに、『ロンドン・レビュー』に「完全敗北」(total defeat) という文章を書きました。彼は、米軍が二〇一一年までに完全撤退すると地位協定に書いてあるのを見て、アメリカが完全に負けたと思ったと言っています。僕は、イラクの中に嘉手納基地のようなところを作ってそこに米軍が入るんだらうと思っていただけで、コバーンの解釈によれば、イラク全土から米軍が出ていくと

いう。そういう地位協定は世界の他のところがないと彼は言います。その解釈が正しいとすれば、これは興味深いですね。アメリカは、負けたんではなくて、積極的に自らの選択として撤退した、という言い方に変えられるからです。「アメリカの敗北を管理する」(managing American defeat)ということですね。それは、コバーンの考えすぎでしょうか。

——この協定は、交渉段階では、たんに駐イラク米軍の「地位協定」だということになっていました。しかし、地位協定というのは、駐留する軍隊の地位を定めるためのものです。それに対してイラク国内から批判があり、地位協定であると同時に米軍の「撤退協定」であるというように看板を架け替えたのです。では、本当に撤退するといえるかどうか。法文を見れば、たしかに、二〇一一年末までに完全撤退と書かれてあります。

ラミス 問題は、米国がそれを守るかどうか、新しい協定をイラクと結ぶんではないか、ということですよ。

——そうです。新しい協定を結べば、米軍はまだイラクにいられる。もうひとつは、新協定までいかになくとも、駐留の名目を変えるという手法があります。いまは、イラクの治安を

すが、イラクと比較すればよくわかります。イラク戦争については、フランスやドイツなども反対する中で行ったブッシュのクーデターでした。しかし、アフガニスタン侵略は、北大西洋条約機構(NATO)が全部乗っかっているわけです。NATO諸国は宣戦布告をしているし、国連決議もいちおう取つてある。オバマはそこに正当性を求めているわけです。しかし9・11事件への報復としてアフガニスタンを軍事侵略することそのものがすでに国際法違反でした。そのことは忘れられているようですが、これが今日の事態を招く発端だったわけです。つまりあの段階は国際法秩序へのグローバル権力の集団的クーデターだったとぼくは見ていました。オバマはこの第一のクーデターのところまで戻ろうというわけです。「五歩前進、一步後退」の「一步後退」のところの一線なのですが、この一線で世界を收拾しようとしてもダメでしょうね。

——もしアフガンから撤退するとすれば、それはどういう政治的レトリックを使いながら、ということになりますか。

武藤 カルザイ政権は北部同盟を中心とした軍閥の上に乗った政権と言われていますが、完全に統治能力を失っているのです。すでにタリバンとの間で独自に汚い政治的妥協を模索してきました。本当に必要な政治解決とは、

守るために駐留していることになっていきますが、これをイラク国軍の訓練のための駐留だと言い換えれば、駐留しつつけられるかもしれません。ただ、そういう方向に行くか、完全撤退になるかは、いまの段階では見通せませんが。

武藤 いずれにせよ、オバマはブッシュの後始末をやらなきゃならない。後始末は撤退という形になるので、イラクの方がまだ容易だと思いますよ。しかし、アフガニスタンは、後始末ではなくて、オバマの戦争になる。それはオバマ政権の命取りになる可能性があります。アフガン情勢は、ほとんど出口なしの状況で、軍事解決の選択はおそらく状況をますます悪化させるしかない。オバマの戦略は典型的な低強度戦争として開発援助と軍事介入を結合していく方式でしょうが、それが成功したためしはない。どこかで政治的な解決に持ち込むしかない。軍事解決方式はパキスタンの体制を崩壊させる危険性があり、下手をするとアフガンとパキスタンを含めて大カオス状態が生まれ、泥沼化していく可能性が強いですね。

ラミス たしかに、アフガンの歴史を見ると、イギリスも追い出したし、ソ連も追い出した。だから、アメリカも簡単には勝てないと思います。

武藤 オバマがアフガニスタンについてはなぜ政治解決ではなく軍事解決をはじめから打ち出しているかという点でカルザイ政権が生き残ることじゃなくて、何とかして和平への動きをつくること、当事者間の交渉によって、ある条件の下でアメリカが軍事的に撤退するということだと思えます。アメリカをはじめとする外国軍の撤退ということが、交渉の最終的切り札になると思うのです。いまの力関係では、タリバンに有利な妥協になるしかないかもしれませんね。クメール・ルージュ支配のような状況とは違っていても、タリバン流のイスラム法の下でとくに女性と世俗化した都市住民にはさうとう厳しい状況になる可能性が高いですね。ですから女性を交渉当事者として入れられるかどうかは、重要な要素だと思います。アフガニスタン軍と警察を米国式に訓練して、それをアメリカとNATO軍が指揮して、タリバンをまず軍事的にたたきつぶすという路線は、アフガニスタンの民衆にとってもアメリカにとっても地獄への道でしょう。

——アメリカ国民にはそれをどうやって受け入れさせますか。

武藤 アメリカ国民はアフガンの人びとがどうなるかが、ほとんど関心を持っていないと思うんです。ベトナム戦争のように「潰走」ではない形で撤退することは、アメリカ国民は歓迎すると思いますよ。

## 東アジアに関心ないオバマ政権、暴走する日本

——オバマの対東アジア政策はどうですか。

ラミス オバマは、東アジアに対する戦略はほとんど考えていないと思います。

武藤 对中国を除いてはね。

ラミス そう。何か変化があるという感じはしません。ただ、あまりよくないことがひとつあります。米国の在沖総領事はケビン・メアという人ですが、沖縄の人たちは、今までの領事のなかでいちばん悪かったと思っています。ブッシュ政権の中のネオコンのひとりという感じですが、縄でいるいるな反対運動をやっている人たちは領事に署名文を持っていったりするんだけど、いちばん威張っていて、いちばん冷たい人。「外交」の能力がないんですよ。ブッシュ政権の顔がはつきり見えてよかったという意見もあります。この四月に自治体の反対を押し切って石垣島に米軍が戦艦を無理やり寄港させたとき、メアは軍艦に乗って一緒に来たんですよ。彼は日本語がある程度できるから、反対運動の人たちに「バカヤロー」と言ったらいいんですよ。ちよつと話がそれますが、領事館の隣にスターバックスがあつて、僕も連れ合いと二人でよくコーヒーを飲みにい

くんですけど、メアも時々ここでコーヒーを飲んでるわけ。半年ぐらい前ですけど、彼が若い女性をナンパしているのを見たんです。どういう会話かというところ、「僕には沖縄で友達かひとりもないもん」なんて言ってるんですよ。「メア・ゴー・ホーム」なんてプラカード書く人もいるんだよ。寂しいよね」といった感じで声をかけてるんです。

で、話を戻すと、彼は今度のオバマ政権で国務省日本部長になります。だから、オバマ政権の日本に対する顔は、彼のネオコンの顔のままなんです。

武藤 東アジア、とくに日本については、いまのところ、アメリカは日本との関係を中国との関係の関数と考えて、日本自体についてはほとんど関心ないんじゃないかと思う。「アメリカにとつてもつとも重要な同盟関係」などと謳っておけば、黙っていてもついてくるという意識が根本にありますからね。二月にヒラリー・クリントン国務長官が日本に来たとき、日本側は新安保条約締結五〇周年を記念して「新安保宣言」を出したいとの希望を口にしたわけですが、ヒラリーはぜんぜん関心なく、何も答えませんでした。新しい駐日大使も、ジョセフ・ナイではなく、全然政治の経験のないシリコンバレーで成功したビジネスマン。自民党政府というものを相手にすべき独立変数とは見てないんじゃないでしょうか。

う路線の枠内で対処する。けれど、具体的にどう交渉を進め、どこに落とし所を設定するかという明確なプランはないんじゃないかと思われれます。ブッシュ政権は少なくとも問題決着の意図は持っていた。でも、北朝鮮から完全に足元を見られて、瀬戸際政策で振り回されて終わりましたね。そして、オバマ政権が東アジアにほとんど関心がない中で、北朝鮮はあやうくオバマ政権の関心を引きつけているわけですね。でも、最近の動きを見ると、軍事と外交がおそらく後継者問題をめぐる内部のダイナミクスに影響される度合いが高まっているのかもしれない。特別の情報など何もないので、はつきりしたことはわかりませんが。アメリカ側は、北朝鮮を軍事的に孤立させて徹底的に叩くというところは考えていない。

ラミス アメリカにその軍事力があるかどうかという問題もありますよね。あちこちで戦争していますから。

武藤 奇妙なことは、北朝鮮に関してだけは、日本政府は突出した瀬戸際路線、北朝鮮を経済的、軍事的に追い詰めて内部崩壊させるという立場をとっていることですね。ちよつと中東でのイスラエルみたいな役割を演じています。ここだけは、やたらに「自主的」で、アメリカを対決に引っぱりこんでいく路線を突っ走っている。ブッシュ政権さえこれには辟易していました。朝鮮半島の非核化とか安定化に右翼の支配する日本の自民党政権は本当に関心ない

んだと思うんですね。日本政府の場合は、北朝鮮とどのような関係を作り上げていくのかといった本筋の考慮からはいつさい政策が決定されていなくて、いかに北朝鮮の核武装を制裁だの先制攻撃能力の獲得だのという物騒な目的にむけた扇動に利用するかということばかりですね。いまの右翼支配勢力には、イデオロギー的な国内政治目標があつて、そのために北朝鮮問題を利用するという観点が優先しているわけです。これは明らかにオバマ外交とは矛盾する。

ラミス 僕の中で言うと、憲法を変えるなど、国内でそれを利用するという感じですね。こういう「危機」状態が続く限り、自民党は負けないとも思っているんじゃないでしょうか。自民党がもうだめになりそうなことは皆わかっています。むしろこれは、党を越えた政治的潮流、社会的な暗黙の圧力が形成されているように感じられます。社会的に「これを公然と言えちよつとやばくなるぞ」という基準が作られている。マスコミでは、自民党の悪口を言ってもまずくならない。しかし、北朝鮮や安保・軍事について根本的な批判を公然と口にするには許されません。孤立させられる、暗黙の基準がだんだんとつくられてしまつて、しかもその基準がかなり右に移動していると僕は見えています。そしてその裏には暴力が隠されている。社会のなかでも「憲法九条をまもる」というのはかまわない。「自民党嫌い」

もかまわない。しかし、北朝鮮への強硬姿勢には反対と言つたらまずい、逆に「不法滞在の外国人は叩きだせ」といっても、それはかまわない、許容できるという式の暗黙の了解が広がっているような気がします。むしろ社会全体が一色に塗りつぶされてしまったわけじゃなくて、別の声や力も大きくなってきたと思います。まだ支配的な潮流の方が強いですね。

だから、北朝鮮については強硬姿勢を示すことを自己目的化した政策が、実効性を持ってしまふわけです。北朝鮮の船舶の臨検なんてとても危険な行為でしょ。戦争に直結する行為ですからね。そういうことを義務化しようと国連で提案する。これは右翼の国内向けの必要からしか出てこない提案です。だから、アメリカもロシアも、右派政権下の韓国だって支持しませんでしたし、むしろ中国だってそうです。だからこの問題では日本政府は国際的に孤立したんですね。

もともと、小泉政権から安倍政権に到る期間というのは相手はブッシュ政権でしょう。だから、国内的な右翼路線からくる日本の北朝鮮政策とブッシュ政権の「テロ支援国」路線とはかなり一致していた。それでも、ブッシュも末期にはかなり迷惑がっていたんです。六か国協議を成功させたいから、拉致問題をすべてに優先させる、それに同調してくれという日本の態度は迷惑だったんですね。そして、

「帝国」としては「五歩前進、一歩後退」だということですね。個別に見れば、オバマ政権は東アジア情勢にほとんど関心がなく、その影で、日本の右翼勢力が北朝鮮問題を利用してながら自らの力を伸ばしている、ということになります。では、こうした動きに対抗していくにはどうすればよいでしょうか。

**武藤** それがいちばん肝心のことですね。たしかに、ラミスの言うように、オバマ政権は「帝国」を推進するんだけど、他方で、草の根の運動の肩に乗って登場した政権だという面もあるのです。オバマが勝って、アメリカ中の何百万の人たちがものすごく興奮した。むしろ、「どうせ帝国主義は帝国主義。資本主義は資本主義。オバマが勝つても何も変わらない」と冷淡な人たちもいたけれど、そう



思っている人たちの多くも、オバマ勝利の瞬間、ものすごい興奮と高揚を感じたらしい。ラミスさんもそう言ってます

いまのオバマ政権にとつては、麻生政権は完全に「外様」。麻生首相は、オバマが当選したとき「おめでとう」も言わず、ひどく失礼な態度をとった。自分たちの狭い右翼的な政治を推進するという考えしかない。だから、朝鮮半島への日本の対応は非常に危険な傾斜を示していると思いますね。ラミス 今度の総選挙で民主党が政権とつてもあまり変わらない？

**武藤** 自民党支配が崩壊する過程ですから、このべつたりした右翼的コンセンサスに大きい裂け目をあけていくチャンスですよ。しかし、民主党政権ということになると、民主党はこの種の根本的な問題に対して原理的な立場を立てていませんからね。右翼支配の自民党政権への批判を最低限やって、別の原則で政治をやるかどうか、疑問です。ですからそこは運動の側がはっきりした原則を共通で立て、この裂け目に切り込んでいくことが必要だし、そうすれば状況を転換する可能性が見えてくると思います。

### オバマ政権を生んだ草の根の力との連携を

——さて、ここまでの話をまとめましょう。オバマ政権は「帝国」であることを止める意思がない。しかし、国際法を無視したり「テロに対する戦争」を展開したブッシュ政権の「クーデター」の線からは後退しようとしていて、その意味で

たね。そういう話をアメリカの友人たちから聞きました。オバマは「チェンジ」と「ユニティ」（統一）をスローガンとして組み合わせて勝利した。「ユニティ」は「民主党も共和党も一緒に」という政治的挙国一致の意味が強く、「チェンジ」とは矛盾している側面があるわけです。「ユニティ」を強調すれば、妥協を強いられて徹底した変革ができない。にもかかわらず、オバマ政権は、ブッシュ政権あるいはビル・クリントンの政権と比べても、下からの圧力にさらされていて、それに応答する柔軟性がある程度備えていると思うのです。

ただ、オバマを草の根で支えた人たちが、たとえば沖縄のことを知っているかという点、全然知らないといっていると思うんです。アフガニスタンについてだつてあまり知らないでしょう。だから、アジアの運動とオバマを支持した草の根の人びとが、お互いを知り合い、手を結ぶようにもっていく必要があると思うのです。はじめにラミスさんは、オバマは国内で多少いいことをやるかもしれない、と言いましたが、「国内でのいいこと」と「世界でのいいこと」が結びつくようにもっていきたい。

三月にワシントンDCで反基地会議がありました（本誌前号参照）。主催者は最初、アメリカの国内会議にするつもりだったのに、沖縄や日本、世界の他の各地から大勢の人が出かけていった。これは象徴的なことでした。「国内

ではないことをするが海外では今のまま」というわけには  
いかなくなるような条件を作り出せないかというのが僕の  
考えです。もちろん、これだけで「帝国」を廃止すること  
はできませんが、帝国の害を多少減らすことができるかも  
しれません。

**ラミス** 去年、九条世界会議があつて、日米安保条約のこ  
とを語りながらないなど、いったい問題はあつたけど、何  
一〇年ぶりに若者があんなにたくさん出てきたのをみて、  
主催者は興奮していましたよ。

**武藤** そう。そういう草の根の動きがあつて、交流を通じ  
て認識が広まる、そういう動きの可能性がオバマ出現に  
よつて高まつたと思ひますね。

**ラミス** オバマ政権は悲劇に終わる可能性があるとはじめ  
に言いました。オバマ政権に失望した人たちががんばつて  
運動にいくのか、あきらめてシニカルになるのかというこ  
とがとっても重要です。

**武藤** 他方で、オバマの登場とは関係なく、世界社会フォー  
ラムのようなグローバルな運動がすでに定着しているわけ  
ですよ。しかし、それと、オバマを生み出した草の根の  
力はほとんど重なっていません。今回オバマを支持した層  
はかなり広いですから、そこに接点をつくつて、グローバ  
ルな運動の方から逆にフィードバックしていく必要がある  
と思ひますね。

——読者に大きな課題が投げかけられたところで、終わりに  
したいと思ひます。今日はどうもありがとうございました。

(六月二四日・ピープルズ・プラン研究所会議室にて)